

卒業生に
贈る
言葉

幸福の年を願って



松山義則
総長

ご卒業のときをお迎えになりました。心からおよろこび申し上げます。
わたくしたちが生きてきたこの二十世紀は、人間の世界が動乱に動乱を重ねた不幸な戦争の時代でもありました。わが国では世紀初頭、日露戦争に突入し双方多くの生命が失われ、ついで一〇年代にはヨーロッパを中心に第一次世界大戦が勃発し、わが国もそれに関与しました。さらに時代は進んで中国領土への侵出、日中戦争から第二次世界大戦へと拡大しました。戦後は米ソの東西対立となり冷戦の緊張した時代を迎えました。その終結は十年以上前のソ連の崩壊によって生じましたが、ひきつづいて、地域紛争、民族紛争、宗

教戦争と南北の対立は深刻化し、世紀末に至ってもなお不幸な戦争の悲劇は絶えません。大航海時代の流れを受けて、人間の歴史はそれぞれの国が富国強兵の策をとり、帝国主義を競い合い植民地の確保、領土拡大に意欲を燃やしました。弱肉強食の非情な原則が横行しました。

戦争の時代はその勝利のために戦略戦術を多様化し、情報操作は白を黒と言い含め、黒を白と宣伝説得する手法を強化するとともに、大量殺戮のための非人道的な新兵器の開発が行われ、人間の頭脳がそのために集中して動員されました。その結果二十世紀はいままでにない科学技術の発展をうながし、これによって人間の生活の利便性をも高めることとなり、二十世紀初頭と比較して、現代は人間の生活の向上が、まことに目をみはるものとなりました。

人間は知弁勇の徳をみがいてきました。競い合って生きる競生のなかで、勝者であるために必要な人間の徳でもあります。豊かな知識と闊達な智恵は人間にとって基礎的、創造的能力であります。弁舌さわやかな発言力、あるいは外国語による論争に立ち向かい論破することの必要は、近時よく語られるところでもあります。また勇氣はものごとを遂行する原動力であります。人類が競争し戦い、そして殺戮する戦争の歴史に用いられてきた知弁勇の徳は、勝利を志向する能力ではありませんが、知識や頭脳がジギル博士の反面のハイド氏に用いられ、弁舌が謀略や巧智、情報操作に墮し、勇氣は猛進する裸の王様を生んでいることも否めません。司馬遼太郎は戦国の武將を語るなかで、知弁勇の徳だけでなく、武將は人に愛される徳を備えねばならないと説いています。関ヶ原の合戦で状況から勝者をすばやく察知する判断、謀略、内通、謀反、寝がえりがあったように、大勢は利得になびき、義さえも論理や修辞によって変容して利のために利用されるのが世の常であります。

住谷悦治元総長はかつてスタンダールの『赤と黒』の小説をとりあげ、好んで話されたと聞いています。

スタンダールの描く主人公、ジュリアン・ソレルは繊細な感受性と不屈の意志、そして美貌にめぐまれた青年でありました。権威や束縛に対する反抗、自由の精神を生涯求めつづけた作家の願いがジュリアンを描いたと思います。片田舎の製材商の子として生まれ、フランス革命のあと王政に復古したきびしい社会のなかにあつて、平民である彼が唯一つ世に出られる道は僧職につくことでありました。町長の息子の家庭教師となつた彼は、その家のレナール夫人を愛したため町を去り、遠くの神学校に入り校長に推されてパリの大立者一侯爵の秘書となり、パリの社交界に交わり洗練されていきますが、かつての愛人であつた町長夫人からの彼を非難する手紙のために、出世の道をふさがれてしまいます。生きる目標を失つた彼は、教会で祈るレナール夫人をピストルで撃ち逮捕され投獄され、遂に断頭台に消えていくという物語であります。ジュリアンという青年に託された人物描写は、桑原武夫、生島遼一氏によると、若々しい率直さ、自然さ、潔癖な正義感を持ち、弱々しい感傷的な人物描写になれた当時の読者には、見ぬくことができず、人びとは彼の行為の野心の強さ、偽善性ばかりに目をむけ、彼が自己に正しく生きた深い意味を洞察できなかつたと解説しています。このように斬新な鋭い心理小説であります。同時に反動にみちた王政の陰うつな社会背景を描き、牢固たる階級社会の陰惨さを語る社会小説でもあります。『赤と黒』という題目は、赤がジュリアンの願う共和主義精神を、黒は僧侶や陰謀にあふれた陰うつな階級社会を示すものと言われています。住谷悦治先生はこの作品をどのような視点で読まれ愛されたかを知るすべもありませんが、先生はお若い時から高尚な精神と豊かな情感にあふれ、鋭敏な感受性にみち、スケッチを好まれるなど芸術性のゆたかな方でありました。また社会のもつ矛盾を敏感にとらえておられました。東大の新人会のメンバーとして、理不尽な酷しい国家主義に抵抗され、弾圧下にあつて同志社大学教授の職を失われた方でありました。スタンダールの『赤と黒』が先生の趣好にあつた作品であつたと考えざるをえません。

多くの人々が語るように、二十世紀が戦争の時代であり、競争と対立の百年であったと思います。戦争というもつとも悲惨な状況はもとより、社会のなかで智力や勇気が高揚して人間の欲望原則がそのまま働いた時代でもありました。ジュリアンは自己の純粋性と自尊心を守り、王政と僧侶社会のなかにみちる、権力と横柄さ、そして陰險な安らぎのない不安のなかにあつても、自己を徹底して透明な思いでみつめ、自己の信念に生き、自由を求め、そして去っていきましたが、人びとはこの人物に心うごかされ深い感動をおぼえたのだと思います。

しかし一方、人間が互いに人間を大切にしたいという願いが、この人類のなかにあふれていることも忘れられません。カルカッタにあつて生涯弱い人びとのために働いたマザー・テレサは「死にゆく人のための家」を開きました。死者が真つ白な布の上にねかされ、花が飾られています。人が死ぬときだけは、大切にしてあげたいという願いです。どの宗教を信じていようとまいと、その人のすべてが尊重され人の尊厳をうけて死んでいくのです。われわれは激しい人間同士の競い合い、争いのなかにあつて、生きざるをえない存在です。しかしこの二千年の年に、自分自らへ透明な眼をむけ、人間とその社会をみすえて、人間らしく自由に生き尊敬しあい、人間の尊厳性を失わない社会を求めたいと思います。「年々にわが悲しみは深くして、いよよ華やぐ命なりけり」と岡本かの子は歌いましたが、個人の人生も、また人間の歴史も年々に悲しみは深まるばかりです。しかし、人間は生きざる意味、よろこびを感じ、輝かしい華やいだ人生を願い、また歴史の形成に参加したいものと思えます。卒業生のお一人おひとりの上に神の祝福が豊かにありますように祈ります。

卒業生に
贈る
言葉

知を養うの学と 徳を養うの学



八田 英二
大学長

一九九九年卒業式及び学位授与式において晴れて学士の学位を受けられる卒業生の皆さん、そして修士ならびに博士の学位を授与される大学院修了生の皆さんに同志社大学長として心からお祝い申しあげます。これまでの皆さんの勉学努力、研究努力に対して深く敬意を表します。皆さんのためまぬ努力が名前の刻まれた学位記となって実を結びました。この間、皆さんを温かく支え、見守ってこられたご家族をはじめ関係者の方々にも衷心よりお祝い申しあげます。巣立ちの日に笑顔一杯の皆さんの顔を見ることは、私たち教育事業に携わる者にとって至高の喜びです。

皆さんが学ばれた同志社大学は、今日わが国屈指の総合大学に発展しております。優秀な教授陣のもと、素晴らしい研究環境を提供し、教育事業の展開を通して社会に貢献することが私学同志社大学の責務です。実際、これまでに約二十数万人の有為な卒業生が本学を巣立ち、実社会のさまざまな分野で活躍しています。これらの卒業生の活躍が母校同志社大学の教育的、社会的評価に結びついています。この点で、同志社大学の将来は皆さんのこれからの活躍に懸かっているといても過言ではありません。

米国から帰朝された新島襄先生が同志社英学校を創立されたのは明治八年十一月二十九日でした。生徒数はわずか八名でした。熊本バンドの学生も加わり、教師と学生が一体となって、文字どおり手作りで学園の基礎を築きました。同志社にとって最初の記念すべき卒業式は明治十二年六月十二日に挙行されております。場所は校内の第二寮階下の講堂と記録に残っています。卒業生総数は十五名で、宗教家であり教育者、のちに同志社総長に就任した海老名弾正氏も卒業生の一員として参列しております。式では卒業生全員により記念演説が行われました。一人二十分の演説で、式は午前十時に始まり、午後五時に終了しました。新島先生は送別の辞のなかで中国の戦国時代の故事に触れておられます。昔、燕の昭王がその国を興すため、広く賢人を招こうとして郭隗にその方法を尋ねたとき、郭隗は「まず隗より始めよ」といい、自分のようにさほどでもない者を優遇すれば、楽毅のような優れた人材が次々と現れると答えました。そして新島先生は「私は隗であり、諸君は楽毅である」と述べられ、巣立っていく卒業生を励まされました。結びに先生はつぎのように締めくくっておられます。

Go, go, go in peace. Be strong. Mysterious Hand guides you!

このような記念すべき第一回卒業式から数えて、本年は節目ともいうべき百二十年目にあたります。新島先生の建学の精神はこの間、ここ同志社大学に連綿と受け継がれてまいりました。皆さんが学ばれた同志社大学は三つの教育理念を掲げております。自由主義、キリスト教主義、国際主義です。建学の精神のもと、同志社大学は教育事業を通じて、わが国の近代社会の形成に大きく寄与してまいりました。今後とも同志社大学は、この役割をわが国の教育界で率先して果たしていかなければなりません。同志社大学の教育事業に対する信念は「良心ノ全身ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ」という良心碑に込められています。時代を問わず、良心碑は同志社教育の原点です。

皆さんが同志社大学、あるいは大学院に入学された折のことを思い出して下さい。その入学式で、「同志社大学設立の旨意」を朗読することにより、教職員一同は同志社大学の教育理念に従いつつ、教育指導に専念することを宣言いたしました。今年もまた、卒業生や修了生の数だけの、自ら立ち自ら治むるの精神を備えた人物、いわゆる自治自立の人民の養成を成し遂げることができました。教育事業の成果ともいべき卒業生や修了生を送り出すことは、私たち教職員一同のこの上ない誇りとするところです。

西暦二〇〇〇年を迎え、時はまさに変革の時代です。この時代に求められているのは、どのような状況でも、つねに自らの生き方を主体的に考える能力をもった人物です。高く理想を掲げ、主体的に問題解決にあたる創造力溢れる人物の育成こそ同志社大学がその教育目的とするところです。皆さんが同志社大学で身につけられた学術技芸の知識、ここで涵養された独立独行の精神を發揮され、二十一世紀の社会を率先して切り開かれることを心から願っています。

ところで、新島先生は、生前、数多くの演説、書簡、説教を残されました。そのなかで、明治十三年十一月に、八代におきまして「学問之説」という演題で講演をされています。その際に、「学問」ということに触

れて先生は

「人此世に生するや忽ち母の乳を求め、其より日々食を求めて不絶、食は肉体を養ふ者也

人に智徳あり、肉の食あるか如く又智徳の食物無るべからず、乃学問なり

(中略)

学問は何ぞ、人間の要道也

学問に種々あるも之を大分せは二個也

智を養ふの学、徳を養ふの学

智を養の学とは何ぞ、今西洋に行る、百般學術技芸也

徳を養の学とは何ぞ、乃心を脩むるの学にして、道徳と称する者也」

と述べておられます。

同志社大学の徽章は智育、徳育、体育を表しています。これらのバランスのとれた人物の育成こそ同志社大学の望むところです。これから社会に船出される皆さんの将来を想う時、ここ同志社大学で培われた「学ぶ心」と「新島精神」を見失わず、これからも弛まず自己研鑽に励まれることを願って止みません。

最後に、学部卒業生ならびに大学院修了生の皆さん一人ひとりの行く末に大いなる期待を寄せて、卒業生の皆さんに贈る言葉といたします。

卒業生に
贈る
言葉

生命輝く二十一世紀 を創る女性に



大橋寿美子
女子大学長

美しい春の日、晴れの卒業式を迎えられた皆様にお祝いの言葉を申し上げます。また、ご同席いただきましたご家族の方々は、二年あるいは四年前の入学式の姿を思い出し、このように見事に成長された女性の姿にどれほど感動しておられることでしょう。一緒に喜びたいと思います。さて、学び舎を巣立ち、これからは各自それぞれの道を歩まれる卒業生の皆様、二十一世紀を担うあなたがたに最後に私の願いを語らせていただきたいと思えます。

昨年、大学の仕事で、ある地方へ参りました。文化の香りの漂う、落ち着いた中規模の都市で、仕事

の合間に町の中央にある立派なお城に上ってみました。晩秋の穏やかな日差し、山と海の美しい眺め、手入れの行き届いた建造物と庭園、楽しそうな観光客の姿、すべてが平穏に調和していました。私はきれいな落ち葉やどんぐりを拾ったり、出会った人々と気軽なおしゃべりをしたりして、自由なくつろいだ時を楽しんでいました。ところが、天守閣に上り、展示品を見て回っている時に、ふと、動けなくなっていました。それはそこに展示してある見事な数本の刀と、それを作った人間国宝の刀鍛冶師の紹介文のせいでした。呀え冴えと厳しい光をたたえて静まりかえった刀、持てばずしりと重いに違いない刀、柔らかい人肌にふれたら、ごく簡単に切ってしまうであろう刀。実に見事で、かつ、恐ろしい刀。野菜を切る包丁の代わりにもならない、材木を切る鋸の代わりにもならない、人を斬るためのみに必要なこの刀が、どうして誇らしげに飾られているのでしょうか。こんなことを考える私が間違っているのかと反省してみました。刀とは昔から三種の神器の一つであること、厳しく潔い武士道の美学を集約するものであること、『菊と刀』という名著に記されるように日本文化の精神構造を象徴する基本的な要素であること、そして、刀とは超一級の技術者が魂を込めて作る伝統工芸品であること、なども考えました。それでも尚、人を斬るための刀を恐ろしいと思うのは人間の素朴な感情ではないでしょうか。

思い巡らせると、現代の兵器についても同じです。二十世紀の発明品である核兵器の絶大な破壊力とそれを開発した科学者たちの高度な知能を認めても、それを賛美したくはありません。戦争など昔のこと、遠いところでのこと、と思わないで下さい。現在でも世界の各地に紛争がありますし、今なお残っている地雷の数は一億一千万個にもほり、日々、人を傷つけているのです。人を傷つけ、人の命を奪い、生活を破壊するような知識や技術、それはどのように理屈をつけて正当化しようとしても、私は容認しないし、容認してはならないと思います。暴力を封じ込めるために必要な暴力、平和のための殺戮という観念的な論理が、現

実には、対立などとは無縁の、ただ、普通に平穏な生活をしていきたいだけの、生身の人間を犠牲にしてきました。「殺すなかれ」という、ごく単純明快な絶対の命題を、私たちはあらためて確認し、声高に主張しなければならぬ、と思います。

このように考えてくると、問題は武器や戦争にとどまりません。現在、日常的に話題になっている公害・環境問題も同じ視点から考えなければならぬでしょう。より便利に、より快適に、より効率よく、と願うのは人間の当然の願いであり、それが知識と技術を発展させ、社会の富と繁栄を築いてきたのは確かですし、それを否定するつもりはありません。でも、十九世紀の産業革命が人間に富と同時に悲惨をもたらしたように、二十世紀のさらに驚異的な科学の進歩は、さらに大きい危険を人類につきつけているようです。兵器ではなくとも原子力発電所のもつ危険、農業やダイオキシンのなどの環境ホルモンによる人体への被害、生殖機能への影響の恐れ、クローン技術による人間存在そのものの物質化の危険など、歯止めをなくせば、人間性、人類全体、そして地球の破壊に連なりかねない状況になっています。その中で、私たちは今、何をなすべきでしょうか。二十一世紀という新しい時代に生き、新しい歴史を創っていくあなたがたの役割は何でしょうか。

私は勉学の上でも、社会人として生活していく上でも、男女の差はないと思っています。女性の領域と言われる出産・育児でさえ、女性だけの仕事ではなく、男女ともにかかわるべきことと思っています。それでもなお、歴史を顧み、現在の日本や世界各国で女性の置かれている状況に目を向けると、やはり男性以上に女性が敏感に反応しなければならぬ領域があるのは事実のようです。それは弱者の立場に立ち、命を守る事。政治・経済体制や大義のための観念的議論ではなく、知識のための知識ではなく、大地にしっかりと立ち、人間の命を守るという究極の目標のために考え、発言し、行動すること。家庭内で自分の子供だけの教

育に熱中する母親ではなく、社会の動きに注目し、人間の生命を軽視するあらゆる動きに異議を申し立てる存在としての女性であってほしいのです。

女はしばしば弱く愚かだと言われてきました。そうではない、と言いたいのですが、それでも構わないとさえ思います。それなら、弱者の論理、愚者とされる者の目の方が時にはくもりがなく、真実を語るのに力ある事を示したら良いのです。ちょうど、シェイクスピアの道化が権力からはずれた存在としてもくとも真実を語るように。「裸の王様」と指摘した子供の目のように。宮沢賢治のように、無力に「おろおろ歩く」人が、つらい時にはもつとも近くにいてほしい友であるように。名譽も権力も富もいらぬ。望みはただ、ごく平凡で、当然の、気持ちよく、平和な生活が、皆に等しく与えられるだけ、こんなささやかな望みが実現できない世界なら、それを変えましょう。そのためには、弱く、愚かと言われても、ためらわずに働きかける力をもってほしいと思います。そうして、観念的議論や、経済効率よりも人間の生命の輝きを何よりも優先させるといふ共通の価値観、究極の願いが、男女の区別なく主流となるなら、二十一世紀は良い時代になりえるでしょう。

二年間あるいは四年間を同志社女子大学で過ごし、生きる力をしっかりと学んで来られたであろうあなたが、これから社会に出て、ご自分が輝いて生きると同時に、周囲の人々を、そして世の中の一人一人を輝かせる存在となつてくださることを期待しています。どうぞ生命輝く二十一世紀を創ってください。あらためてご卒業おめでとう、そして今後の確かな歩みをお祈りします。